

はるかな海



飯沼佳子

私が初めて海を見たのは、小学校六年の修学旅行の事でした。

それは今から二十数年前になりますが、ところが、今、信州の子ども達の夏休みは海と切り離しては考えられなくなっています。

夏休みの一番の楽しみは海水浴です。身近な山へ出掛けるより海へ海へと山国の子どもはなびぎます。

私の子どもの頃とは隔世の感があります。二十数年前、そのころ小学生だった私には、海は、はるかに遠く実際行く事など考えられない所でした。一人私に限った事でなく、周りの子どもも皆同じ情況でした。海は心にも描けない存在でした。

終戦後の貧しい時代だったので。いえ、正確には、今考えるところあの頃は貧しかったと思うだけで、当時、自分達は貧しいとは

考えませんでした。それがあたり前の時代だったので。子ども達の頃、夏休みどこかへ出掛けた思い出と言えば、母に連れられ、長い道を歩き、電車にすこし乗り……それも電車賃を浮かす為、目的地の一駅前で降り、又、長い道を黙々と歩き父親の墓まいりをしたその事だけです。私の家族だけがそうでなく、まわりもこれと似たりよったりだったと思います。ですから、私も、仲間の子どもも海とは全く異なった世界に住んでいました。海ははるかに遠く心に描くこともできない、生活の外の事だった気がします。

しかし、又、生まれて初めて見た海の印象も定かではありません。三保の松原の松が心に残るのみです。めずらしいとは言いません。

い松の木、しかし、日常見て来たそれとはちがう枝ぶり、松をとりまく風景の新鮮さが松の木の一点に絞られて思い出されるのかも知れません。

成長して何回か海へ行きました。と言っても指をおってその一つ一つを数えられる程ですが。それらの海は一つ一つ印象鮮やかに思い出されます。年甲斐もなくと笑われそうですが、旅に出て海が見える毎、思わず感嘆の声をあげてしまいます。

今、海を思う時、やはり、あこがれと言ってよい感情を抱きます。旅と言えば、海の見える所へと思います。

山と言う巨大な壁からときはなたれ、見わたす限り平らな海面に出合う時、それから離れられなくなります。自分の周りに作られている目に見えぬ壁が目の前の波にくずされ、広大な海がそのまま私の中に広がっていく様です。海にひかれる一つの故かも知れません。動かぬものの代名詞に使われる山、その山に囲まれた日常生活から、刻々と色も波の大きさも、うねりも変わる海に出合う時、その変わる海にひかれるのかも知れません。

又、海の色的美丽さにひかれます。エメラルド色の海には胸さわぎを感じ、エメラルド色を感じさせない海には海を遠く感じます。同じ海がその色の違いで身近になったり、遠い存在になったりします。

気候風土が育てる人間の地域性を考えますと、山国信州気質はその土地柄からして、ごつごつとして、内にこもり勝ちで、因習にとらわれる所が多いかと思えます。それに反して、変化する海、広大なひろがりを持つ海、とらえどころのない海、その海辺に生きる人々はきつとその海と同じ、ゆったりさを持っているのではないかと想像します。

しかし、動かぬ代名詞の様な山も何万年単位の動きの中では変化しています。私の周りの山も、今を盛りと天空にそびえたつ壮年期の高山あり、丸みをおび、高さもさほどなく老齢期の山あり、山とは言い難い丘陵になり、死滅近い山ありと、動いている山を感じます。

又、長野県では、つい最近野尻湖底の第七次発掘が、小・中学生を含めた三千人という大集団で行なわれました。今は湖底になっているそこで、古代人が生活したであろう、貴重な資料が次々発掘され、動きゆく大地をここからも身近に感じます。

とすれば、山も海も時間の違いだけで、動いている点では変わりないのかも知れませんが……。

日常性を持たぬ海には、とかくロマンを感じ勝ちです。が、水俣のそして神通川のいまわしさを考えると遠い海も恐ろしさを持って身近になって来ます。

(松本青い鳥幼稚園)